

| | |
|---------|------------------------------------|
| 氏名 | 木村卓爾 |
| 授与した学位 | 博士 |
| 専攻分野の名称 | 歯学 |
| 学位授与番号 | 博乙第 3096号 |
| 学位授与の日付 | 平成9年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 博士の学位論文提出者(学位規則第4条第2項該当) |
| 学位論文題名 | 剖検例における舌の潜在性異形成および上皮内癌に関する病理組織学的研究 |
| 論文審査委員 | 教授 永井教之 教授 西嶋克巳 教授 松村智弘 |

学位論文内容の要旨

【目的】

舌癌は口腔領域の悪性腫瘍のうちで最も発生頻度が高く、近年増加の傾向を示している。治療に際しては、早期発見、早期治療が重要とされながらも、現実には進展例が多く、治療成績向上を障害する一因となっている。

癌の早期発見・治療には癌の初期病変の理解が不可欠である。しかし、舌癌の前癌あるいは初期病変としては異形成、上皮内癌などが注目されているが、その研究は他臓器の同様の病変に比して少ないのが現状である。一方、腫瘍の統計的解析によれば腫瘍の多重・多発発生は、個体側の素因に加え、共通の組織により構成され、共通の発癌因子に曝される可能性の高い臓器に誘発される傾向が指摘されている。舌癌を含む頭頸部癌に食道癌を合併する頻度は極めて高い。したがって、咽頭・食道癌剖検例の舌には、高い確率で舌癌の初期病変が存在することが予想される。そこで、本研究では舌扁平上皮癌の初期病変を確認し、臨床において舌癌の早期発見・治療に役立てるために、咽頭、食道癌の剖検症例について生前に病変を確認されていない舌を詳細に病理組織学的に検索した。

【対象症例と方法】

対象症例：国立病院四国がんセンターにおける剖検症例137例について検討した。舌癌と関係の深いとされている食道癌と咽頭癌を主疾患とする30症例（全例男性30例、平均年齢68.4歳）を第1群とし、それ以外の臓器の悪性腫瘍を主疾患とする70症例（男性44例、平均年齢62.8歳、女性26例、平均年齢66.0歳）を第2群とした。また、腫瘍性病変の認められない非腫瘍症例37例（男性23例、平均年齢56.6歳、女性14例、平均年齢64.9歳）を第3群とした。また、舌癌初期病変の発生部位を進行癌のそれと比較するために舌癌手術症例53例について検討した。

検索方法：剖検時摘出され、ホルマリン固定されていた舌の可動部分すなわち舌尖部から有郭乳頭後方までの範囲を連続して約5mm間隔で前額断して切り出し、その全断面の大標本を作製し、通法に従ってパラフィン包埋、薄切後、H E染色を施して検鏡した。

診断の基準はWHOの定義に準拠し、異形成(dysplasia)は細胞異型および構造異型を示す上皮内病変であり、上皮内癌とするには異型度が十分ではない病変とし、その程度に応じて軽度と高度異形成に分類した。上皮内癌は粘膜上皮内にとどまり上皮下組織への浸潤のないものとした。有意差検定には、 χ^2 検定法を使用した。

【結果】

第1群(咽頭, 食道癌症例, 30例)では軽度異形成が1例(3.3%), 上皮内癌が3例(10.0%)が認められ、第2群(咽頭, 食道癌以外の悪性腫瘍症例, 70例)では、軽度異形成5例(7.1%), 高度異形成3例(4.3%), 上皮内癌4例(5.7%)が認められ、その内の3例が胃癌症例であった。第3群(非腫瘍症例)には異形成, 上皮内癌いずれも認められなかった。これらの病変は舌癌の好発部位である舌の側縁部に認められ、また手術された進行性舌癌53例中47例における病巣の主座は舌側縁にあった。

発生頻度：第1群の軽度・高度異形成以外、第1, 2群ともに舌の前癌・初期癌病変の発生は第3群に対して有意差が確認された。第1群と第2群の間には有意差はなかったが、胃癌症例を食道癌・咽頭癌とともに第1群とする組み替えをおこなうと第1群と第2群でも上皮内癌の発生に有意差があった。

異形成・上皮内癌発生部位：これらの舌癌初期病変の発生部位はいずれも舌の後方, 側縁部に集中していた。すなわち、本研究で発見された舌の潜在性異形成や上皮内癌の発生部位と進行性舌癌のそれはよく一致していた。

【考察および結論】

舌癌の初期病変と考えられる異形成と上皮内癌が、第1群(咽頭, 食道癌症例)と第2群(咽頭, 食道癌以外の臓器の悪性腫瘍症例)は第3群(非腫瘍性症例)に比し有意に高率に発生していた。このうち特に上皮内癌7例中3例が第1群の食道癌症例であり、また、第2群の上皮内癌4例中3例に胃癌を合併しており、舌癌が同じ扁平上皮組織から発生する食道癌のみならず、胃を構成する腺上皮から発生する腺癌である胃癌とも重複する可能性が高いことが確認できた。

これにより、他臓器、特に食道、咽頭さらに胃に癌を有する患者は舌癌の高危険因子であることを示唆した。

論文審査結果の要旨

この研究は舌扁平上皮癌の初期病変を多中心性発癌の立場から解明する目的で剖検症例について検討したものである。すなわち生前に病変が確認されていない舌を 1) 舌癌と関係の深い食道・咽頭癌症例群, 2) 1) 群以外の臓器の悪性腫瘍を主疾患とする症例群, 3) 非腫瘍性症例群の 3 群に分類し病理組織学的に詳細に検討した。

その結果, 食道・咽頭癌症例および組織型の異なる胃癌症例においても高頻度で舌癌の潜在性初期病変が認められ, 食道・胃・咽頭癌の患者は, 舌癌の高危険因子であることが示された。

これは舌癌の初期病変の追究に役立つ有用な業績と考える。従って本研究者は博士(歯学)の学位を得る資格があるものと認める